

研究ノート

軍艦「足柄」の英国観艦式派遣及びドイツ訪問について

川井 裕

【要約】

日本海軍は、その創建時から遠洋練習航海及び軍艦の海外派遣を通して諸外国、なかでも英国との親善交流を継続して行ってきた。特に軍艦「足柄」の英国観艦式派遣及びドイツ訪問については、日本海軍がそれまでの親英から親独へと傾斜する転換期に実施されたということで象徴的な出来事であった。

はじめに

2007(平成19)年11月28日から12月1日の間中華人民共和国のミサイル駆逐艦「深圳」が、そして2008(平成20)年6月24日から同28日の間その答礼として海上自衛隊の護衛艦「さざなみ」が、1949(昭和24)年の中国建国後初めて相互に訪問し合い親善交流を深めた。これらの艦艇訪問は防衛交流の一環として10年ほど前に日中間において合意されていたが、歴史認識問題などに起因する中国側の対日感情の悪化に伴いその実施が見合わせられていたものである。近年の日中関係は「政冷経熱」と称されるほど政治的に冷え込んでいたため、「相互訪問は、相手への無用な疑心を和らげ、信頼を培っていくことにこそ意味がある。日中の軍事部門同士が交流を積み重ねていけば、両国のみならず、東アジアの安全保障にも資するだろう」と期待された<sup>1</sup>。

戦前の日本海軍においても創建時から遠洋練習航海及び軍艦の海外派遣を通して諸外国、なかでも英国との親善交流は継続してなされていた。特に1937(昭和12)年の軍艦「足柄」の英国観艦式派遣及びドイツ訪問については、日本の安全保障環境がワシントン及びロンドン海軍軍縮体制から海軍軍縮無条約時代の中で、日独伊三国同盟へと傾斜する転換期において実施されたということで象徴的な出来事であったが、その詳細については必ずしも十分に明らかにされていない<sup>2</sup>。そこで本稿では、「足柄」の派遣準備から帰国までを「公

<sup>1</sup> 『毎日新聞』2007年12月1日。

<sup>2</sup> 野村實『日本海軍の歴史』(吉川弘文館、2002年)135-141頁。相澤淳『海軍の選択—再考 真珠湾への道—』(中央公論新社、2002年)46-83頁。平間洋一『第二次世界大戦と日独伊三国同盟—海軍とコミンテルンの視点から』(錦正社、2007年)20-22頁。ベルトホルト・ザンダー＝ナガシマ『日独海軍の協力関係』工藤章、田嶋信雄編『日独関係史 一八九〇—一九四五—Ⅱ 枢軸形成の多元的力学』(東京大学出版会、2008年)252頁。

文備考」に残された史料を主に用いながら紹介するものである。

## 1 派遣準備

### (1) 正式招請前

明治維新後の日本の皇室と英国の王室との縁は深く、また、日本海軍は英国に範をとった関係もあり、日本は英国国王の戴冠式及び同記念観艦式には皇族と軍艦を派遣してきた。英国の観艦式はポーツマス軍港沖のスピッドヘッド錨地において举行されるのを例とし、1902(明治 35)年のエドワード 7 世(在位：1901-1910)のときは小松宮彰仁親王と軍艦「浅間」、「高砂」が、1911(明治 44)年のジョージ 5 世(在位：1910-1936)のときは東伏見宮依仁親王と軍艦「鞍馬」、「利根」がそれぞれ派遣されている<sup>3</sup>。また、1922(大正 11)年の日英同盟消滅後においても、1928(昭和 3)年 12 月に横浜港外で举行された昭和天皇の即位を記念する大礼特別観艦式には英国から「ケント」、「サフォーク」、「ベリック」の 3 隻の軍艦が派遣され<sup>4</sup>、翌年にはジョージ 5 世の第 3 王子であったヘンリー・グロスター(Henry Gloucester)公が昭和天皇にガーター勲章を授与するため訪日するなど日英間の親交は続いていた<sup>5</sup>。このためジョージ 5 世が 1936(昭和 11)年 1 月 20 日に亡くなると、外務省及び海軍省を中心にして新国王エドワード 8 世(在位：1936)の戴冠式への昭和天皇の弟宮である秩父宮雍仁親王の参列と観艦式への軍艦派遣が早速検討され始めた<sup>6</sup>。

「公文備考」に残された新国王の戴冠式行事に関する最も日付の古い文書は、ジョージ 5 世死去後僅か 1 カ月の 2 月 21 日に海軍省副官によって起案された「英國皇帝戴冠式ノ件」である<sup>7</sup>。これには駐日英国大使館付海軍武官(以下、駐日英国武官と表記)との会合を利用しての戴冠式行事に関する情報収集の様子が記録されている。日本政府は英国との距離の問題もあり、英国政府からの戴冠式行事への参加招請を早めに知る必要があり、主に駐英日本大使館を通して必要な情報の収集に努めた。5 月 30 日には有田八郎外務大臣(在任：1936. 4. 2-1937. 2. 2)から駐英代理大使宛てに「新帝戴冠式ニ關シ帝国海軍ニ於テハ観艦式

<sup>3</sup> 野村『日本海軍の歴史』58-60、86-87 頁。

<sup>4</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」(防衛研究所図書館蔵) 624-626 頁。英国のほかには、アメリカ、フランス、イタリア、オランダから各 1 隻の軍艦が参加している。なお、「公文備考」にはページ番号が付記されていないため、当研究所がマイクロフィルム記録用として各ページに押印した整理番号があるものは、これを便宜的にページ番号として表記する。以下、同じ。

<sup>5</sup> イアン・ニッシュ「同盟のこだま—1920-1931 年の日英関係」木畑洋一他編『日英交流史 1600-2000 1—政治・外交 I』(東京大学出版会、2000 年)。

<sup>6</sup> 柴田紳一『昭和期の皇室と政治外交』(原書房、1995 年) 73-97 頁。

<sup>7</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」998-999 頁。

ニ軍艦派遣ノ議アル處英国政府ニ於テハ帝国軍艦招請ノ意嚮アリヤ観艦式予定日取ト共ニ内査ノ上電報アリタシ」と指示されている<sup>8</sup>。これに対し6月9日には駐英大使館付海軍武官（以下、駐英武官と表記）から軍務局長（豊田副武中将）宛てに「……〔英国〕艦隊ノ大部ガ地中海ニ集中シアル現状ニ於テ日取ノ發表ハ艦隊引揚ゲ時期ヲ豫想セシムルコトトモナルヲ以テ地中海ノ情勢平穩ニ復スルニアラザル限り之ガ發表困難ナル情況ニアルヤニ推察セラル」と報告されている<sup>9</sup>。即ち、当時英国は7月に勃発することになるスペイン内戦に備え艦隊の大部分を地中海に派遣しており、観艦式の日程を公表することは艦隊の撤収時期を明らかにすることになるので発表は困難であるというのである。また、独身であったエドワード8世のアメリカ人女性ウォリス・シンプソン(Wallis Simpson)との所謂「王冠を賭けた恋」が政治問題化し、スタンリー・ボールドウィン(Stanley Baldwin)首相の反対に合うなど戴冠式を挙行できる状況ではなかったのである。しかしながら、日本海軍が英国観艦式に軍艦を派遣するには十分な事前準備と予算措置を講じる必要があり、「艦隊編成、人事配員等ノ都合モアリ戴冠式観艦式ニ帝國軍艦招請ノ英國政府内意ニ關シ機宜内査セラレ成ルヘク速ニ通知アリタシ」と軍務局長から駐英武官に対し指示されている<sup>10</sup>。このように事態のなかなか進捗しないうちにエドワード8世が在位僅か11カ月余りで12月には自ら退位してしまったため、軍艦の派遣及び秩父宮の参列は一端自然消滅となってしまう<sup>11</sup>。

その後、エドワード8世に代わりジョージ5世の第2王子であったジョージ6世(在位：1936-1952)が即位したものの英国はスペイン内戦のため艦隊の大部分を依然として地中海に派遣したままであり、戴冠式行事に関する日程については未だ正式には発表されなかった。そのため日本海軍としては「……前例ノ如ク其ノ際帝國軍艦ノ派遣ヲ招請シ且帝國之ニ應請セラルル場合……豫メ必要ナル準備ヲ内密ニ進メ置クコトトス……」として軍艦の英国派遣に関する本格的な準備が開始されることになる<sup>12</sup>。この12月21日に起案された「英國皇帝戴冠式ニ艦船特派ノ件覚」には、軍艦の英国派遣に関する具体的な大綱が示されている。この大綱からは当初派遣部隊については第二艦隊第五戦隊の「足柄」と「摩耶」の2隻が、指揮官には第五戦隊司令官の小林宗之助少将が予定されていたことがわかる。行動予定についても実際とは異なり「英本国ノ外獨逸、佛国（北海岸）及伊国ヲモ訪問スルコトトス」として「横須賀～鳥羽～シンガポール～アデン～マルタ～ポーツマス～キール～ヘル・アーブル～ジブラルタル～ナポリ～ポートサイド～コロombo～香港～横須賀」の順で計画されていた。また、経費の概算については、燃料重油 15,740 トン=630,000 円、行動用消耗品=16,000

<sup>8</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」613頁。

<sup>9</sup> 同上、615頁。

<sup>10</sup> 同上、616-617頁。

<sup>11</sup> 同上、1254頁。秩父宮の戴冠式への参列は、1936（昭和11）年10月19日に決定されていた。

<sup>12</sup> 同上、630-635頁。

円、航海加俸=150,000 円、臨時増給=50,000 円、接待費=10,000 円、出張旅費=30,000 円、合計=886,000 円と見積られていた。これらの計画を立案するに際しては本案件が政治・外交上重要な問題であったため、前述した 1902(明治 35)年及び 1911(明治 44)年の前例を綿密に検討していたことがわかる<sup>13</sup>。具体的には、軍艦への搭載物件、錨地、補給、人員、観艦式行事及び外国における儀礼などについての事例を調査研究している。

秩父宮の参列についても、ジョージ 6 世の即位に伴い 12 月 26 日には「雍仁親王殿下ヲ英國ニ差遣ハサレ且妃殿下御同伴相成ベキ旨」が再度決定された<sup>14</sup>。

## (2) 正式招請後

1937(昭和 12)年 1 月 4 日、駐英武官から「戴冠式観艦式日取り五月二十日ニ決定シタル旨本日〔英国〕海軍省ヨリ通知アリ尚招請有無ニ關シテハ未ダ定マリ居ラズ」と報告されていたところ<sup>15</sup>、2 月 18 日には外務省を經由して「……来ル五月十二日舉行セラルル英國皇帝陛下ノ戴冠式ニ際シ同月二十日「スピットヘッド」ニ於テ舉行セラルル観艦式ニ各海軍國軍艦各一隻宛招待スルコトト相成タル趣ヲ以テ……帝國政府ニ對シテ招請有之タルニ付……」と日本政府に対する正式の招請がなされた<sup>16</sup>。

この招請を受けて 2 月 20 日には前年 12 月 21 日の大綱の方針に沿って、軍務局第一課長(保科善四郎大佐)が「大英帝國皇帝戴冠式観艦式ニ軍艦派遣ノ件」について、海軍大臣(米内光政中将)に決裁を仰いでいる<sup>17</sup>。この時点で英国派遣艦が、当初の計画であった第五戦隊の「足柄」、「摩耶」の 2 隻から第五戦隊司令官が直率する「足柄」のみに変更された。選考理由については、①「足柄」は英国派遣に備え既に配員上の措置をとっていること。②艦長が指揮する個艦よりも司令官が指揮する旗艦を派遣する方が、派遣効果が大であることを挙げている。また、寄港地についても「尚獨海軍側ノ切ナル希望モアリ又最近日獨防共協定成立〔1936(昭和 11)年 11 月〕ノ關係モアリ此ノ際特ニ累年獨練習艦ノ来訪ニ對スル答訪ノ意味合ニ於テ同艦ヲ獨逸ニ寄港セシムルコトトス」とされたが、フランス及びイタリヤへの寄港は取り止められた。

実際にドイツ海軍の軍艦「ハンブルグ」、「エムデン」などが 1923(大正 12)年から 1937(昭和 12)年の間、7 回も日本を訪問していた<sup>18</sup>。特に、「足柄」の派遣直前の 1 月 18 日から同

<sup>13</sup> 同上、1035-1059、1091-1131 頁。

<sup>14</sup> 同上、1255 頁。

<sup>15</sup> 同上、1325 頁。

<sup>16</sup> 同上、639-642 頁。

<sup>17</sup> 同上、636-638 頁。

<sup>18</sup> 同上、656-657 頁。

23日の間「エムデン」が横浜に寄港し、靖国神社参拝、東京・日光・鎌倉見物、横須賀軍港見学、アットホームなどの寄港地行事を実施していた<sup>19</sup>。さらには「足柄」の日本出発後、6月7日から10月19日の間実施された昭和12年度の練習艦隊（「八雲」、「磐手」）の遠洋練習航海では、フランス（マルセイユ）及びイタリア（パレルモ、ナポリ）に寄港することが計画されており<sup>20</sup>、このことも寄港地選定上の要因となったものと考えられる。このドイツ訪問の決定に対して、3月6日には駐独大使館付海軍武官（以下、駐独武官と表記）から「足柄キール訪問ノ件獨国海軍ハ非常ナル満足ニテ特ニ長官ハ本件実現考慮サレタルニ対シ海軍大臣宛謝意伝達方依頼セリ」と報告している<sup>21</sup>。

引き続き2月23日には「……外務、海軍両省ヨリ同時發表迄部外發表差控ユルコト及訪獨ノ件ハ對英關係上特ニ當局發表迄嚴ニ秘密ヲ守ルコト……」を旨とする閣議説明が、海軍大臣からなされた<sup>22</sup>。その際、経費については、当初886,000円と見積られていたものを984,500円に計上し直すとともに、100万円以内と発表することにされた。

なお、前述の閣議説明資料の余白には「途中ノ行動ヲハヤメ極力艦隊不在中ノ期日ヲ短縮ス米國ハ經由セザルコト、有効ナル実戦的各種実験ヲ行フ」とする担当課長である第一課長の手書きのコメントが残されている<sup>23</sup>。このことから英国からの正式な招請が遅かったこともあるが、「足柄」の日本不在の期間を極力短縮したいとする軍務局の意図が窺われる。このことがフランス及びイタリア寄港の取り止めにつながったものと考えられる。

そして、2月24日には海軍次官（山本五十六中将）から「……司令官海軍少将小林宗之助ノ率ユル軍艦足柄（艦長海軍大佐武田盛治）ヲ差遣セシメラルル予定…」とする旨を、英国政府に対し回答するよう外務次官に通知された<sup>24</sup>。また、その際には「……獨國訪問ノ日時機ニ發表スルコトハ此ノ際適当ナラズト認メラルルヲ以テ『キール』寄港ノ件ハ英國トハ時機ヲ異ニシ獨國側ニ交渉ヲ進メラルル様取計ハレ度右發表時機ハ三月十日ト予定致度」と外務省側に依頼している。この日本からの英国に対する正式の回答を待って、2月25日には駐英武官に「……五月九日『ポーツマス』着二十二日發ニテ軍艦一隻派遣セラルル予定ナリ…」と<sup>25</sup>、3月3日には駐独武官に「……獨逸訪問ノ件ハ三月十日頃内外發表ノ予定ニ付貴官含ミ迄……」とそれぞれ軍務局長から通知されている<sup>26</sup>。発表時機を3月10日に設定したのは、「足柄」の英国派遣に伴う部隊編成をその日に予定していたためと考えられる。

<sup>19</sup> 同上、1533-1534頁。

<sup>20</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷二」716-730頁。

<sup>21</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」792頁。

<sup>22</sup> 同上、645-648頁。

<sup>23</sup> 同上、643-644頁。

<sup>24</sup> 同上、665-667頁。

<sup>25</sup> 同上、676-677頁。

<sup>26</sup> 同上、786-788頁。

## 2 派遣部隊等の概要

### (1) 部隊編成

「足柄」の英国派遣に関する外務省及び海軍省を中心とした外交的な交渉が一段落した1937(昭和12)年3月2日に、海軍次官から連合艦隊及び第二艦隊の司令長官宛てに次のとおり内意が通知された<sup>27</sup>。

- 一、三月十日附足柄ヲ第四戦隊ニ編入セラレ同戦隊ニ司令官ヲ置カル
- 二、足柄ハ第四戦隊司令官之ヲ率ヒ觀艦式ニ参加ス
- 三、第四戦隊司令部ハ右任務終了内地帰着後解消足柄ハ第五戦隊ニ復帰セシメラル
- 四、第四戦隊司令官及同幕僚ハ概ネ現第五戦隊ノ職員ヲ以テ之ニ充テラン

こうして「足柄」の英国派遣に伴う第二艦隊の編成は、「第四戦隊（「高雄」、「摩耶）」、第五戦隊（「那智」、「羽黒」、「足柄）」から「第四戦隊（「高雄」、「摩耶」、「足柄）」、第五戦隊（「那智」、「羽黒）」に、3月10日付で改編され<sup>28</sup>、同時に第五戦隊司令官の小林少将は第四戦隊司令官に転補された。小林少将は、フランス駐在、国際連盟陸海空軍問題常設諮問委員会海軍代表者随員及びジュネーブ海軍軍備制限会議全権委員随員などの経験を有する国際事情に明るい軍人であった。そして、翌日には第二艦隊司令長官から「足柄ハ第四戦隊司令官指揮ノ下ニ……來ル五月二十日舉行ノ英國皇帝陛下戴冠式觀艦式ニ参加スベシ」と命令された<sup>29</sup>。九州近海で訓練中であった「足柄」は、大隈半島東岸の志布志湾を3月15日に出港し、同16日午後横須賀軍港に集結した<sup>30</sup>。

「足柄」は1922(大正11)年に締結されたワシントン海軍軍縮条約の排水量制限のもとで、平賀讓造船官の設計により建造された10,000トン級の妙高型重巡洋艦4隻のうちの1隻として1929(昭和4)年8月に就役し、1935(昭和10)年2月に第1次近代化改装工事を終えた比較的新しい艦であった<sup>31</sup>。また、同年9月に発生した第四艦隊事件により妙高型においても船体強度上の欠陥が問題とされて、「足柄」を含む同型艦4隻は1936(昭和11)年の初めに補強工事も実施されていた。妙高型は軍縮条約の制限によりつくり出されたもので、

---

<sup>27</sup> 同上、680-683頁。

<sup>28</sup> 同上、765-766頁。

<sup>29</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1020頁。

<sup>30</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」889頁。

<sup>31</sup> 福井静夫『日本の軍艦』（出版協同社、1956年）31-32頁。東清二「図で見る重巡『足柄』変遷史」雑誌「丸」編集部編『写真 日本の軍艦』第5巻（光人社、1989年）90-94頁。

「条約型巡洋艦」あるいは「重巡洋艦」と呼ばれ、日本海軍では一等巡洋艦に類別されていた。妙高型は、「……高速発揮に際して機関の馬力をなるべく小さくするため、従来より長い船体とし、当然生ずる船体重量の増加を防ぐために、後端近くの乾舷を小さくし、中央部乾舷も必要最小として……艦の重心の低下をはかり、船幅を小さくする等の主要寸法上の考慮を払い、また船体長の増大による船体の撓み振動を防止するためには、極力縦通材に連続性を与えることとし……船殻重量は従来の巡洋艦に比べ一〇パーセント余りも軽くなった」ことをその特徴としていた<sup>32</sup>。

3月25日には1911(明治44)年の前例にならい第四戦隊司令官、「足柄」艦長らは、海軍大臣、軍令部総長(伏見宮博恭王)とともに宮中において賜饌を賜り、昭和天皇に拝謁した<sup>33</sup>。また、下士官以上についても3月25日及び同29日の2回に分けて賢所の参拝をした。そして、3月31日には海軍大臣官邸において第四戦隊司令官、「足柄」艦長以下13名が招待され、駐日英国大使、林銑十郎首相、佐藤尚武外務大臣(在任:1937.3.3-1937.6.4)及び海軍次官らが参加して大臣主催の午餐会が催された<sup>34</sup>。

なお、「足柄」は任務完了後の7月15日付で元の第五戦隊に編入されている<sup>35</sup>。

## (2) 人 員

1937(昭和12)年4月1日現在とする「第四戦隊司令部並足柄總員名簿」には、司令部では小林少将を始め先任参謀の黒島亀人中佐(後に連合艦隊先任参謀として真珠湾攻撃計画を立案)、副官の前田精中佐、参謀の中島親孝大尉(戦後、戦史に関する著作を公刊)、司令部付の牧野茂造船少佐(呉海軍工廠造船部員として戦艦「大和」の建造に従事)及び内藤清五軍楽特務大尉(戦後、東京消防庁音楽隊創設とともに初代隊長に就任)、「足柄」では艦長の武田盛治大佐、副長の渡邊清七中佐、軍医長の木村芳男軍医少佐及び軍医の春日正信軍医少尉ら軍人929名分の氏名を、それぞれ確認することができる<sup>36</sup>。総員名簿には出身地も記載されているが「足柄」が佐世保軍港を母港としていた関係上、士官以外は四国、九州の出身者で占められている。また、海軍では「雇員傭人規則」を定め艦船部隊

<sup>32</sup> 牧野茂、内藤初穂編『牧野茂艦船ノート』(出版協同社、1987年)51-52頁。また、英国において「足柄」は、その艦影から「飢えた狼」と評されたが、それは必ずしもその精悍さや優秀性を認められたからではなかった(石渡幸二『艦船夜話』(出版協同社、1984年)112-113頁)。

<sup>33</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」1323-1324頁。

<sup>34</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1051-1055頁。

<sup>35</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」736-738頁。

<sup>36</sup> 同上、839-886、1369-1372頁。『歴史写真』第288号(1937年5月)には、横須賀出港間際の「足柄」とともに小林少将と武田大佐の写真が掲載されている。

において使用する傭人の定数を決めていたが<sup>37</sup>、司令部には従僕 2 名、割烹 2 名、剃夫 1 名、「足柄」には割烹 1 名、剃夫 4 名の計 10 名分の傭人氏名も記載されている。

次に、派遣された人員数であるが、それを知る手がかりは三つある。

一つ目は、2 月 23 日に海軍省経理局から昭和 12 年度追加予算要求に計上するため「足柄」の英国派遣に関する経費の見積りを関係各部局に照会する際に提示された次の人員内訳表である<sup>38</sup>。ただし、これには軍属及び便乗者の数は含まれていない。

区 分	士 官	特務士官	下士官	兵	合 計
第五戦隊司令部	8	2	23	9	42
足 柄	33	22	189	568	812
甲種軍楽隊	0	2	25	19	46
合 計	41	26	237	596	900

二つ目は、日本出発前に第四戦隊参謀から駐英武官に通報された乗員数で表にまとめると、次のとおりである<sup>39</sup>。

士 官	特務士官	准士官	下士官	兵	軍 属	便乗者	合 計
41	11	17	236	635	10	6	956
	28						

三つ目も同じく日本出発前に第四戦隊参謀から駐独武官に通報された乗員数で表にまとめると、次のとおりである<sup>40</sup>。

士 官	特務士官	准士官	下士官	兵	軍 属	便乗者	合 計
41	12	17	236	635	9	6	956
	29						

これらのことから実際に派遣された人員数については、総員名簿では便乗者 6 名を除き 939 名（軍人 929 名、傭人 10 名）となっているが、入国手続きなどの必要性から駐英及び駐独武官に通報された 956 名の方が近いものと思われる。

なお、派遣期間中、兵 2 名が病気のため兵 1 名が訓練中の事故により死亡し、そして兵 2 名が洋上において失踪している。

<sup>37</sup> 海軍大臣官房編『海軍諸例則 卷二（4）』（原書房、1986 年）431-446 頁。

<sup>38</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」658-660 頁。

<sup>39</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1063-1065 頁。

<sup>40</sup> 同上、1153-1154 頁。



## (3) 便乗者

練習艦隊の遠洋練習航海には、早い時期から軍事思想普及のために小中・師範学校などの教育者、世界各地の貿易事情の調査をして輸出品の新販路を開拓し対外貿易の振興を図るために商工省の技師、あるいは海上防衛の観念を国民一般に普及するために新聞社外報部員らが部外から便乗していた<sup>41</sup>。例えば、昭和 3(1928)年度には小学校長 3 名<sup>42</sup>、昭和 4(1929)年度には小学校長 3 名と中学校長 1 名の計 4 名の者が便乗者として乗艦している<sup>43</sup>。便乗者の経費は実費のみ支払われ<sup>44</sup>、待遇については「艦内ニ於ケル待遇ハ士官室士官ニ準ズルモ艦隊乗員トハ明カニ差異アルモノナリ」とされていた<sup>45</sup>。

練習艦隊と同様に「足柄」には、士官室士官待遇として学者の藤澤親雄、洋画家の中村研一、同盟通信社記者の皆藤幸蔵及び漫談家の福原駿雄（徳川夢声）の 4 名と准士官待遇として撮影技師（カメラマン）の白井茂及び江見澤喜三郎の 2 名が、海軍軍事普及事務をそれぞれ囑託され便乗者として乗艦していた<sup>46</sup>。便乗者の選考に当っては、その人物の人柄、将来性及び海軍に対する理解・貢献度などが考慮されている<sup>47</sup>。

また、これらの便乗者は日本出発前の 1937(昭和 12)年 3 月 27 日に水交社に集められ、海軍側から海軍省副官、第四戦隊司令部副官らが参加して「今次軍艦足柄ニ便乗ヲ許可セラレタル新囑託者ノ便乗効果ヲ大ナラシムルタメ事前所要ノ注意ヲ與ヘ啓発スルノ目的」のため顔合せを兼ねた事前打合せが実施されている<sup>48</sup>。便乗者の服務等については、正式に事務を囑託されている関係上厳しく定められていた。具体的には、同盟通信社記者に対しては「極力海軍軍事普及宣伝ノ通信ニ協力セシム」こと、撮影技師に対しては「撮影ノ活動写真『フィルム』ハ……発表前海軍省ノ検閲ヲ受ケシム」などが指示されていた<sup>49</sup>。

<sup>41</sup> 「昭和三年 公文備考 艦船六 卷六十九」1635-1638 頁。

<sup>42</sup> 同上、1559-1561 頁。

<sup>43</sup> 「昭和四年 公文備考 F 艦船 卷四」392-406 頁。

<sup>44</sup> 「昭和三年 公文備考 艦船六 卷六十九」1635-1636 頁。

<sup>45</sup> 「昭和四年 公文備考 F 艦船 卷四」407-408 頁。

<sup>46</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」813-820 頁。日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人 10』(日本経済新聞社、1984 年) 359 頁。都築政昭『鳥になった人間―反骨の映画監督・亀井文夫の生涯』(講談社、1992 年) 60-61 頁。

<sup>47</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」808-812 頁。

<sup>48</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1046-1047 頁。

<sup>49</sup> 「足柄」の帰国後、白井茂らが撮影したフィルムを海軍省軍事普及部指導のもと編集し、「怒濤を蹴って―軍艦「足柄」渡歐日誌―」(編集：亀井文夫、演奏：海軍軍楽隊、解説：徳川夢声)と題する映画が制作され、1937(昭和 12)年 9 月下旬から文部省推薦作品として上映された(『東京日日新聞』1937 年 9 月 19 日(夕刊)、9 月 21 日(夕刊)。岩崎昶『日本現代史体系―映画史』(東洋経済新報社、1961 年) 191 頁。亀井文夫『たたかう映画』(岩波書店、1989 年) 20-23 頁)。なお、同作品の権利を保有する株式会社東宝ステラ及び映画フィルムなどの収集・保存に当たっている東京国立近代美術館フィルムセンターにも現物はなく、その現存は確認できなかった。

そして、行動中において福原は、「例ニ依ツテ昨夜ハ〔徳川〕夢声氏ノ漫談第三兵員室ハ忽チ爆笑ノ坩堝ト化シテシマツタ司令官以下乗員一同満悦ノ体」と娯楽の少ない艦内にあって乗組員を度々慰労していた<sup>50</sup>。藤澤は文部省国民精神文化研究所所員、日本文化聯盟国際部担当の肩書きを持ち、以前から海軍省嘱託を委嘱されていたが、8カ国語を話す語学力を買われて選考されていた。藤澤に関してはその経歴等が異色であったためか、駐日ドイツ大使館付海軍武官から海軍省副官に対し便乗の目的等について照会されている<sup>51</sup>。これに対し「本件獨武官ノ執拗ナル質問依リ推シ獨側ニ於テハ藤澤氏ノ便乗ニ相当関心ヲ有シアルモノノ如シ……」とする海軍省副官のコメントが付されているが、実際藤澤は派遣期間中の6月1日から同11日までの間、ベルリンからローマまで単独行動をしてポートサイドで「足柄」に復帰している<sup>52</sup>。その目的を「政治経済文化ノ研究」とする記述はあるものの、何か特別な任務を与えられたものなのかは不明である<sup>53</sup>。また、藤澤については、派遣期間中に病気で長男を亡くしたことが、帰国後に海軍省軍事普及部から新聞報道されている<sup>54</sup>。そして藤澤以外の5名は、帰国後の7月12日付をもって海軍省事務嘱託を解かれている<sup>55</sup>。

#### (4) 秩父宮

昭和天皇の名代として戴冠式行事に参列することになった秩父宮兩殿下は、陸軍の随員本間雅晴少将及び海軍の随員新見政一少将らとともに「足柄」とは別行動で、1937（昭和12）年3月18日に平安丸で横浜から出発している。本間少将は駐英武官など英国での勤務経験が豊富であり、新見少将は少佐・中佐時代にロンドンで第1次世界大戦の戦史研究に従事した経歴を持っていた。秩父宮らはカナダの太平洋への玄関口であるバンクーバーからトロント、オタワを経由して、4月7日にアメリカのニューヨークから「クイーン・メリー」号で大西洋を横断して4月12日に英国サザンプトンに到着している<sup>56</sup>。新見少将は

<sup>50</sup> 軍艦足柄「足柄新聞」（防衛研究所図書館蔵）1937年5月1日。「足柄新聞」は、日本出発から帰国まで艦内においてほぼ毎日発行されたもので、各寄港地の案内、川柳及び日本のニュースなどが掲載されている。また、4月27日の第24号に「差當リ今月新聞代次ノ通り集金致シマス 下士官十五銭 兵十銭」とあることから乗組員からの資金によって運営されていたことがわかる。なお、4月16日の第13号及び6月7日の第54号が欠落している。

<sup>51</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1131頁。

<sup>52</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」929-930頁。

<sup>53</sup> 同上、1527頁。

<sup>54</sup> 同上、1451-1452頁。

<sup>55</sup> 同上、821頁。

<sup>56</sup> 同上、1258-1260頁。『アサヒグラフ』第28卷第18号（1937年4月）3-5頁。鈴木昌鑑監修、芦澤紀之編『秩父宮雍仁親王』（秩父宮を偲ぶ会、1970年）659-660頁。『雍仁親王実紀』（吉川弘文館、

観艦式終了をもって随員としての任務を解かれ、「足柄」に乗艦してドイツに渡り、訓令に基づきドイツ、フランス、アメリカの各地を視察した後 9 月に帰国している<sup>57</sup>。また、秩父宮兩殿下らは 10 月 15 日に氷川丸で帰国されている<sup>58</sup>。

### 3 任務行動の概要

#### (1) 「足柄」の行動

「足柄」の行動海域は、「所要日數三ヶ月餘總航程約二萬二千六百餘哩ニ達シ酷暑ノ熱帯地方ヲ含ム廣區域ノ海面ニ亘リ……」と海軍大臣に対する「任務口頭報告案」にあるとおり<sup>59</sup>、横須賀～四国沖～南西諸島東方～バッシー海峡～南シナ海～マラッカ海峡～インド洋～紅海～スエズ運河～地中海～ジブラルタル海峡～ドーバー海峡～北海～キール運河を経てバルト海に至る広い海域で、寄港地ごとの出入港日時については、次の表のとおりであった。

寄港地等	出入港日時		寄港地等	出入港日時	
横須賀	入港		キール	入港	5月24日1000
	出港	4月3日1000		出港	5月31日1600
シンガポール	入港	4月11日0900	ジブラルタル	入港	6月5日不明
	出港	4月13日1200		出港	6月6日1500
アデン	入港	4月23日0900	ポートサイド	入港	6月11日0800
	出港	4月24日1600		出港	6月13日0530
マルタ	入港	5月1日0830	コロンボ	入港	6月22日1300
	出港	5月3日1800		出港	6月25日0800
サザンプトン 港外	入港	5月9日1000	香港	入港	7月3日0900
	出港	5月10日不明		出港	7月5日1600
ポーツマス	入港	5月10日0800	佐世保	入港	7月8日0830
	出港	5月22日1000		出港	

1972年) 548-549頁。

<sup>57</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」965、1300頁。提督新見政一刊行会編『日本海軍の良識 提督新見政一～自伝と追想～』（原書房、1995年）81頁。

<sup>58</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」1308頁。

<sup>59</sup> 「足柄新聞」では、全航程 22,966.9 マイルとしている（「足柄新聞」1937年7月8日）。

寄港地についてはドイツのキール以外は全て英国領であったため、1937（昭和12）年3月9日に佐藤外務大臣から「足柄ハ……英領諸港ニ寄港スルニ付爲念英國側ニ於テ……差支ナキヤ御確メ相成ルト共ニ便宜供與方依頼シ置カレタシ」と吉田茂駐英大使に指示され、3月16日には英国政府の了解を取り付けている<sup>60</sup>。

なお、4月6日付の「海軍公報」においてはコロンボ入港を6月23日に、また、帰国については7月10日に横須賀入港とそれぞれ予定されていたが<sup>61</sup>、コロンボ入港については一日早められ、帰着地についても人員交代や船体修理のため7月8日に「足柄」の母港である佐世保入港と変更された<sup>62</sup>。

「足柄」の行動予定を計画する際には、使用速力を15節（ノット）とするよう軍務局長から指示されていた<sup>63</sup>。前述した昭和12年度の遠洋練習航海においては「通常發揮シ得ル最大速力十節半乃至十一節」であったので<sup>64</sup>、軍艦の艦齢及び機関能力の相違などを考慮しても、「足柄」はかなり高速を使用したことになる。

使用速力の選定に当っては、所要燃料総額及び航続距離を検討したうえで決定されたことが、次のとおり記録されている。

総航程 24,000 哩トシテ充分ナル余裕ヲ取り所要燃料総額（10%余裕ヲ取り）

速力	一昼夜燃料（トン／日）	総 額
12kt	83	7,612 トン
14kt	111	8,710 トン
15kt	130	9,570 トン
16kt	157	10,830 トン

使用シ得ル庫量 2,470 トン（10%ヲ残スコトトシ）

使用速力	航続距離	使用速力	航続距離
12kt	7,640 哩	15kt	6,080 哩
14kt	6,670 哩	16kt	5,370 哩

即ち、総航程を 24,000 マイルに見積ると、燃料については使用速力 15 ノットでは 1 日当

<sup>60</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」674-675 頁。

<sup>61</sup> 同上、826 頁。

<sup>62</sup> 同上、741-745 頁。

<sup>63</sup> 同上、684-692 頁。

<sup>64</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷二」720 頁。

り 130 トンを消費し、総額では 10 パーセントほどの余裕を取り 9,570 トンが必要であることを示す。また、燃料タンク容量のうち 10 パーセントを残すこととして、使用速力を 15 ノットとした場合の航続距離は 6,080 マイルであることを示す。従って、単純に計算しても最低 4 回以上の燃料補給が必要なことがわかる。ただし、軍艦における燃料の保有量については任務の特殊性や安全性を考慮して、ある一定の基準が定められていたので、実際にはその基準を満たすように各寄港地において燃料を補給する必要があった。

## (2) 観艦式

小林少将は、帰国後の 1937(昭和 12)年 8 月に日本外交協会主催の講演会において、「観艦式は大奇無し」として「英國の艦艇の参加したもの百四十隻七十三萬噸、別に商船、漁船等が百五十隻ばかり参加し、外國船も十何隻参加して居った。イタリーは戴冠式並に観艦式當時イギリスと相當反目して居ったので、遂に軍艦を派遣しなかつた。……観艦式には全體で約三百隻の艦が並び、其處を皇帝が御召艇で御通過御親閲になった。……スペイン方面、地中海方面に相當の軍艦を残して居り、又本國にも修理等に掛つて居る艦が相當あつたらしく、あの程度の観艦式は日本に於ても常に行はれて居るので、観艦式の大きさに於て特にどうと云ふことは感ぜられなかつた」と述べている<sup>65</sup>。このことから観艦式の方式は、受閲艦艇が停泊しその間を観閲艦艇が航行するものであったことがわかる。また、そこには前述した昭和天皇の大礼特別観艦式を含め大規模な観艦式を数年おきに挙げてきた日本海軍の自信のほどをも窺える。そして、5 月 20 日の式当日小林少将は国王ジョージ 6 世に拝謁し、「足柄」艦長とともに戴冠式記念章を授与されている。

なお、観艦式にはアメリカから戦艦「ニューヨーク」、フランスから戦艦「ダンケルク」、ドイツからポケット戦艦「アドミラル・グラフ・シュペー」が参加し、そしてソ連からは陸軍次官であったミハイル・トハチェフスキー元帥とともにバルチック艦隊の旗艦であった戦艦「マラート」が派遣されることになっていた。ところが直前にスターリンの赤軍大粛清により元帥が失脚したため代表者が変更になっている<sup>66</sup>。

秩父宮兩殿下は、当初各国代表とともに P&O 汽船の「ストラスモア」に乗船され陪観されることになっていたが、英国側からの特別な申し出により日本代表のみが地中海艦隊司令長官ダドリー・パウンド(Dudley Pound)大将の座乗する旗艦「クィーン・エリザベス」

<sup>65</sup> JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B02030916800、本邦対内啓発関係雑件／講演関係／日本外交協会講演集 第二十卷 (A-3-3) (外務省外交史料館)。

<sup>66</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」962-963 頁。

に乗艦して参列された<sup>67</sup>。そして、秩父宮兩殿下はパウンド大将夫妻による特別な接遇を受けられ、式後「足柄」を非公式に訪問されている。

### (3) 諸実験及び研究調査

1937(昭和12)年3月16日に定められた第四戦隊の「行動竝ニ主要作業豫定」には、航海中の主要作業として諸実験及び研究調査を実施することが計画されていた<sup>68</sup>。これは前述した「有効ナル実戦的各種実験ヲ行フ」という軍務局の意向を受けて計画されたものと考えられるが、帰国時の「任務口頭報告案」には「……実験研究諸調査其ノ他ノ詳細ニ關シマシテハ何レ書類ヲ以テ報告致シマス」とあるものの記録は残されていない<sup>69</sup>。

しかし、牧野造船少佐の「……乗艦に際しての私の任務は、南方巡航に対する艦内設備の調査と、戴冠式に集まる各国の最新式軍艦の調査が主であった」とする設計者としての回想からその一端を知ることができる<sup>70</sup>。「艦内設備の調査」に関しては、インド洋の荒天時に「足柄」の耐波性を確認したり、発炎筒の煙を利用した実戦的な防毒訓練に立ち会っている<sup>71</sup>。これらを通して牧野は、「足柄」の船体は低乾舷のため荒天時には凌波性が悪いこと、艦内の通風系統に欠陥があることなどを発見している。そして、これらは以後の改装艦の改善や戦艦「大和」型の通風設計に取り入れられている。また、「最新式軍艦の調査」については、英国の軽巡の艦橋に装備された遮風装置の技術を解明し、帰国後、呉の造船実験部<sup>72</sup>における模型実験を経て各艦に装備されるようになった<sup>73</sup>。前述した「足柄」の使用速力に対する燃料消費と航続距離との関係については、「……航海距離をだいたい二千浬ぐらいで英領の港にはいるように計画され……改装工事で巡航タービンが改造されたが、一六ノットの巡航速力では燃料の消費が大きく、入港には燃料の過半を消費する状態で、実質航続距離が少ないのに驚いたものだった」としている<sup>74</sup>。

<sup>67</sup> 同上、918-920頁。『アサヒグラフ』第28巻第25号(1937年6月)6-7頁。鈴木監修、芦澤編『秩父宮雍仁親王』668-674頁。提督新見政一刊行会編『日本海軍の良識 提督新見政一』84頁。

<sup>68</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」828-838頁。

<sup>69</sup> 同上、1009頁。

<sup>70</sup> 牧野、内藤編『牧野茂艦船ノート』215頁。

<sup>71</sup> 同上、218-219頁。

<sup>72</sup> 福井『日本の軍艦』216頁。1936(昭和11)年7月、呉海軍工廠に設置された実験研究機関で、主として模型・実艦実験を行った。

<sup>73</sup> 牧野、内藤編『牧野茂艦船ノート』217頁。

<sup>74</sup> 同上、216頁。

## (4) 情報活動

世界の海軍国は英国の戴冠式に伴う観艦式には自国の力を誇示しようとして、艦歴・艦型・性能で特長のある軍艦を競って派遣するのを例としていたので、親善目的とは言えその場は参加する各国海軍にとって最新の軍事技術に接する絶好の機会でもあった。そのためには事前に情報収集、秘密保全に関する要求や基準を定めておく必要があった。

「足柄」のドイツ訪問発表後の1937(昭和12)年3月17日に駐独武官から軍務局長宛てに「足柄獨逸寄港ヲ機トシ交換見学等ノ議モ起ルベク予想セラルル處接衝上必要ニ付足柄見学許可範圍ニ關シ小官含ミ迄ニ指示アリ度……現地ニ於テハ開放的ニ扱ヒ得ル如クサルル様希望ス」と「足柄」の艦内公開に関する確認がなされている<sup>75</sup>。そこで、本件に関する研究会が3月25日に軍務局、艦政本部、航空本部、軍令部、第四戦隊司令部及び「足柄」の関係者を海軍省に集めて開かれ<sup>76</sup>、艦政本部がまとめた「軍艦足柄見学案内要領案」について協議された<sup>77</sup>。そして、その結果を受けて艦政本部から「……獨國海軍トノ交換見学ニ對スル當部希望」が再度提出され<sup>78</sup>、4月2日にはこれを基にして軍務局長から第四戦隊司令官宛てに「軍艦足柄獨國在泊中交換見学ニ於ケル見学許可範圍」が示された<sup>79</sup>。細部については別紙のとおりであるが、外国海軍、一般外国人及び在留邦人ごとに見学許可範圍を定めている。特に、外国の官憲及び海軍に対しては主要な装備の見学を制限している。また、「外國ノ港灣ニ於テハ棧橋又ハ岩壁ニ横付セザルコト」、「砲戰教練實施ノ場合ハ砲ノ最大仰角ヲ察知セシメザルコトニ付特ニ注意ノコト」などとする具体的な保全措置も取られている。

なお、これらの制限は当初ドイツを対象として計画されていたが、4月23日に駐英武官から「足柄一般拝觀ニ關シ當地英人側ノ希望アリ……一般拝觀ノ許可否ヲサレ度」との確認に対して、「一般外國人ニ對シテハ成ルベク觀覽ヲ許可セズ」と回答していることから英国にも準用されたことがわかる<sup>80</sup>。

日本においては要塞地帯法及び軍機保護法により軍港、軍用航空機などの撮影、模写が厳しく制限されていた。実際、「足柄」の帰国時、佐世保鎮守府が大坂朝日新聞社など6社を集めて「足柄」の写真撮影を許可した折にも、3枚の写真が検閲で没収されている<sup>81</sup>。

<sup>75</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」1368頁。

<sup>76</sup> 同上、1377-1378頁。

<sup>77</sup> 同上、1379-1384頁。

<sup>78</sup> 同上、1359-1366頁。

<sup>79</sup> 同上、1357-1358頁。

<sup>80</sup> 同上、1415-1417頁。

<sup>81</sup> 同上、1421-1434頁。

そこで3月22日に海軍省副官から「今次帝国軍艦足柄ノ貴国〔英国〕訪問往復ノ際寄港スベキ各地ニ於ケル写真撮影或ハ『スケッチ』等ノ禁止区域御面倒デモ御知ラセヲ得ハ幸甚ニ御座候」と駐日英国武官に確認している<sup>82</sup>。この問い合わせに対して駐日英国武官は、「……英國領土内ニ於テハ概シテ海軍造船所、陸軍廳等ノ如ク明確ナル柵、障壁等ヲ以テ囲マレ一般ノ入場ヲ禁ゼラレタル場所ノミ写真撮影或ハスケッチ等ヲ禁ゼラレ居リ一般ニ公開サレタル場所ニテハ通常何等ノ制限ハ無之候」と回答するとともに「軍艦足柄ガ各地入港ト同時ニ此ノ點ニ關スル地方規制ヲ同艦長ヘ通知スル様夫々ノ關係地方當局ヘ依頼致シ置候」と懇切な処置を取っている<sup>83</sup>。さらには英領諸港における便宜供与を日本側から依頼していた関係もあり、ポーツマス軍港における無線電信局の周波数、呼出符号なども併せて通報されている<sup>84</sup>。しかし、これは「足柄」の派遣が、親善目的であったため寄港地における無用なトラブルを事前に回避したいとする日本側の意向が働いたものであったかもしれないが、結果的には写真撮影などの制限につながったものと考えられる。

一方、寄港地や航海中において他国の軍事動向などに関する動態情報に偶然接する機会にも恵まれた。4月25日紅海北上中のところ日本船からの無線通報によりスエズ運河を通過し南下するソ連の浮きドックと行き会い、「一、船渠ハ『ソビエツト』ノモノニシテ蘭国商船二隻（各約千噸級）ニ曳航セラレ『オデツサ』ヨリ『バタビヤ』經由浦鹽斯徳〔ウラジオストック〕ヘ回航中曳航速力約七節 二、船渠ノ長サ111米幅37米5,400噸ノ船舶迄入渠可能ナリ」と報告している<sup>85</sup>。また、6月5日のジブラルタル寄港に際しては、直前の5月29日にスペイン内戦中の反政府軍を支援していたため共和国政府軍の爆撃機の攻撃により損傷し、同港に退避していたドイツのポケット戦艦「ドイッチュラント」及び触雷のため損傷した英国の駆逐艦「ハンター」に遭遇している。そして、『ドイッチュラント』ハ『ジブラルタル』寄港傷者及ビ死体収容ノ上帰国スルモノノ如シ、同艦ノ損害ニ關シ会合當時外見上ハ艦体ニ異状ヲ認メズ、人員ノ死傷ハ直接爆弾ノ被害ニヨルホカ『ガソリン』庫ニ引火ニヨル火傷最モ多數ナリ『ハンター』ハ機雷ノ爆発ニヨルモノト称セラレ重傷者比較的多シ當時在院數『ドイッチュラント』46、『ハンター』19」と詳細に被害状況を報告している<sup>86</sup>。

他方、ドーバー海峡通過時、牧野造船少佐は英国の夜間防空演習を偶然目撃した際、地上から照射される探照灯が航空機を速やかに捕捉することに気がつき、帰国後、この事実

<sup>82</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1102頁。

<sup>83</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」1352-1355頁。

<sup>84</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1127-1129頁。

<sup>85</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」915頁。

<sup>86</sup> 同上、926-928頁。JACAR:B02030916800。観艦式に参加した「アドミラル・グラーフ・シュペー」は、「ドイッチュラント」の同型艦である。



を艦政本部や呉海軍工廠の関係者に対して、「〔レーダーの技術を〕研究してみる余地があるのでは……」と進言したものの取り入れられることはなかった<sup>87</sup>。

#### (5) 寄港地行事

前述の「行動竝ニ主要作業豫定」及び「任務口頭報告案」によれば、寄港地ごとに親善を目的とする各種の交歓行事が計画・実施された。そして、その成果については「帝國海軍ノ新威力ニ接シマシタル邦人ノ感激ハ多大デアリマシテ忠君愛國ノ念ヲ新ニシ祖國ノ威力ト其ノ後援ヲ信ジ一層活氣ヲ加ヘ又我ガ國情ニ疎キ外國人ニ對シマシテモ相當ノ影響ヲ與ヘタ様デアリマス」と報告されている。また、日本の国情紹介に当っては、「……豫メ準備シマシタ圖書映畫ヲ利用シ或ハ講演、演奏等ヲ行ヒマシテ出來得ル限りノ努力ヲ致シ……」と意を用いている。

英国領であったシンガポール、マルタ及びジブラルタルでは英国側の便宜を得て軍事施設の見学が行われている。特に、シンガポール軍港については、英国政府による建設の開始や工事の中止、再開の決定が日本では非常に注目され、しばしば日本の新聞に大見出しで報道されていた。1922(大正11)年の日英同盟破棄以来、海軍部内において反英的雰囲気次第に醸成されるようになったが、その一因は英国によるシンガポール軍港強化計画に対する日本側の危機感にあったと言われている<sup>88</sup>。このことは「足柄」の艦内において行われたシンガポールに関する講話にも見て取ることができる。即ち、「大艦隊が長い間行動するためには之を収容する『ドック』を始め多くの設備が必要である。然し東洋に於ける大艦隊を修理収容する設備がなかったので『シンガポール』に一億圓に近い豫算をもって目下工事中で、最大主力艦を入れるに足る浮ドックは既に完成して居る。この事を以てしても大戦後の『イギリス』は如何に東洋方面に力を入れて居るのがわかる」と認識されていたのである<sup>89</sup>。そして、小林少将からは「『シンガポール』、香港兩基地ノ大拡張ニ加エ『ポートダーウィン』基地構築ハ本年〔1937(昭和12)年〕五月ノ英國議會ニオイテ決定ヲ見タ模様ナリ、三基地完成スレバ過般ノ大軍備拡張計画ノ進行トアイマツテ英國ノ極東兵備ハ著シク強化サレル」こと、「軍事調査ト誤解サレルヨウナ我ガ方ノ累次ノ行動ハ強ク英國ノ神経ヲ刺激シ益々対日警戒取締リヲ嚴シクサセ、邦人ノ立場ヲ困難トシ邦人間ニ投資

<sup>87</sup> 中川靖造『ドキュメント 海軍技術研究所—エレクトロニクス王国の先駆者たち』（日本経済新聞社、1987年）49-50頁。

<sup>88</sup> 池田清「日本の対英戦略と太平洋戦争」細谷千博編『日英関係史 1917-1949』（東京大学出版会、1982年）84頁。

<sup>89</sup> 「足柄新聞」1937年4月8日。ヘンリー・プロバート、池田清訳「イギリスの戦略と極東戦争」細谷編『日英関係史』114-119頁。

事業拡張ニ対シ手控エノ傾向ヲ生ジサセテイル」とする情勢認識が示され、その対策として「一層言論ノ統制ヲ厳ニシテ当分スパイ行動ヲ一切中止スル等更ニ刺激ヲ除クコトニ努メルトモニ平和的発展ノホカ他意ノナイコトヲ機宜普及サセルコト」などが必要であると報告されている<sup>90</sup>。

「足柄」には前述したとおり内藤軍楽特務大尉以下 46 名の軍楽隊が臨時に乗艦していた。そして、全ての寄港地で「足柄」艦上や陸上施設などにおいて合計 32 回の演奏活動をしている。特に、マルタでの第 1 次世界大戦時地中海に派遣され活躍した第二特務艦隊の墓地参拝の際やキール、ベルリン市内では演奏行進をも実施している<sup>91</sup>。特に、1937(昭和 12)年 5 月 25 日のベルリンでは「……『足柄』の儀仗隊は軍艦マーチを吹奏する軍楽隊を先頭に南下を開始、ケーニヒプラッツを経て、戦勝記念塔を通過し、ブランデンブルグ門を抜け、ウンター・デン・リンデンを通過して無名戦士の墓まで行進した。3 キロの沿道では当日休校となったベルリン全市の小学校児童が日独両国旗を手にとり列し、ブランデンブルグ門では群集が軍艦旗を打ち振り、歓呼を持って迎えた。全く自国軍の凱旋を迎えるような熱狂ぶりでベルリン市民としては空前のことといわれる」というほどにその広報効果は大きかった<sup>92</sup>。

なお、帰国後、軍楽隊から演奏活動全般については問題なく実施できたが、「儀礼及招待會等出席ノ場合不都合ヲ感ゼシニ付是非他科同様ノ通常礼装制定セラレ度」と准士官以上の服装に関する要望が提出されている。

寄港地における官憲の要人や在留邦人などを「足柄」に招待し催された交歓行事（アットホーム）では、日本の伝統的な武芸などの紹介がなされている<sup>93</sup>。そして、参加した在留邦人の中には「……小領土を踏み内地に帰った心地すると暗涙に咽ぶ者さえ有った」ということである<sup>94</sup>。

## (6) 医務衛生

「足柄」の軍医長からの医務報告によれば、横須賀出港後 3 日にして 4 月上旬だというのに外気温は 25～28 度に湿度も 80～90 パーセントとなり、シンガポール出港後には室温

<sup>90</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」901-903 頁。

<sup>91</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1198-1202 頁。

<sup>92</sup> 日本経済新聞社編『私の履歴書』360-361 頁。入江徳郎他編『新聞集成 昭和史の証言』第十一卷（本邦書籍、1985 年）270-271 頁。楽水会編『海軍軍楽隊—日本洋楽史の原典—』（国書刊行会、1984 年）111 頁には、ベルリン市内を演奏行進する軍楽隊の写真が掲載されている。

<sup>93</sup> 『アサヒグラフ』第 28 卷第 27 号（1937 年 6 月）29 頁。

<sup>94</sup> 「足柄新聞」1937 年 5 月 16 日。

37度まで上昇し艦内生活は徐々に苦しいものとなった<sup>95</sup>。特に、往復路ともシンガポールからスエズ運河までの間は艦内に熱気がこもり、夜は外気を取り込み易い魚雷発射管室に交代で兵員を就寝させるようになった。それでも毎夜、露天甲板に忍び出て仮眠する者が多く出て、甲板士官が手を焼いたようだ。前述した失踪者2名は海中転落又は投身自殺と判断されていたが<sup>96</sup>、このことが原因であったのかもしれない。また、無線送信室、発電機室、調理室、洗濯機室などは最高室温が50度にも達し、風呂場に入ったような暑さで全ての兵員は上半身裸で当直するありさまであった<sup>97</sup>。このような生活環境の悪化にともない徐々に受診患者が増えていった。以後、新患者発生は一日平均4名、受療患者は一日平均35名、各患者は軽微の内科的疾患を除き概ね外傷及び外皮病で、休業を要する者16名と報告されている。また、4月13日及び同20日には艦内においてコレラの予防接種が実施されている。

そして、日本出発後3日目から脚気予防のための措置が、次のとおり取られるようになった。

脚気豫防トシテノ「ポリガ」配給ニ就テ 主計科

本日ヨリ夕食時紙包トシテ各食卓へ配給スル「ポリガ」粉沫ハ「<sup>ママ</sup>ビタミン」Bヲ多量ニ含有セルタメコレヲ食スル事ニ依ツテ脚気ヲ豫防スルノミナラズ人体ヲ構成スル種々ノ栄養ガ含マレテ居マス……價モ相當高價デスカラ粗末ニシナイヤウ必ず食シテ下サイ<sup>98</sup>

脚気予防のための措置が1930年代後半の日本海軍においても通常なされていたものなのか、あるいは「足柄」が熱帯地方を行動するために特別に取られたものなのかは判然としない。しかし、前述したとおり4月24日には敗血症より多発性筋炎を併発して二等機関兵が死亡し<sup>99</sup>、翌日紅海において水葬にされ<sup>100</sup>、さらには5月7日に胸膜炎より結核性脳膜炎を併発して三等水兵が死亡している<sup>101</sup>。また、帰途中の6月29日にはシンガポール沖で練習艦隊と会合し、胸膜炎の下士官兵6名（「磐手」4名、「八雲」2名）を内地送還のため「足

<sup>95</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」907-908頁。

<sup>96</sup> 同上、955-956頁。「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1194-1195頁。

<sup>97</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」909-910頁。牧野、内藤編『牧野茂艦船ノート』215頁。

<sup>98</sup> 「足柄新聞」1937年4月6日。

<sup>99</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」907-910頁。「足柄新聞」1937年4月25日。

<sup>100</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」913-914頁。

<sup>101</sup> 同上、916-917頁。「足柄新聞」1937年5月7日。

柄」に収容している<sup>102</sup>。これらのことから当時の艦内生活における衛生状態の一端を知ることができる。

おわりに

「足柄」のドイツ滞在は僅か1週間ばかりであったが、その歓迎振りは「……各方面の歓迎を受けるのに忙殺されて疲労困憊……」するほどで<sup>103</sup>、ベルリンにおいては国賓としての待遇を受けるとともに小林少将以下6名の者が勲章を授与されている<sup>104</sup>。また、キール運河通航料の免除、移動手段としての軍用機や列車の無料提供など各種の便宜をも供与されている。特に、キール運河通航料の免除は破格の扱いであったようで、ドイツ側からは他国との関係上内密にするよう申し入れされている<sup>105</sup>。さらには1937(昭和12)年5月26日に小林少将のアドルフ・ヒトラー(Adolf Hitler)総統への謁見が<sup>106</sup>、また、9月13日にはヒトラーの意向と日本陸軍からの強い要請により「足柄」の帰国後も欧州視察を続けられていた秩父宮とヒトラーとの会見が、ナチスの党大会が開催されていたニュールンベルグにおいて行われている<sup>107</sup>。

1907(明治40)年の軍艦「筑波」、「千歳」以来30年振りとなった「足柄」のドイツ訪問は<sup>108</sup>、ドイツの外交政策をより親日へと転換する契機となり、この機会を対日接近に利用しようとしたのである<sup>109</sup>。そして、ドイツの対日政策は、1938(昭和13)年5月の独満修好条約による満州国の承認、同年7月の軍事顧問団の中国からの引き上げによって明確化していった。

「足柄」の帰国後、小林少将は直ちに上京し、1937(昭和12)年7月12日午前、海軍大臣に対する任務報告が大臣室において次官、軍務局長、教育局長、艦政本部長、航空本部長、軍令部次長ら省部の首脳を集めて行われた<sup>110</sup>。また、引き続き午後からは昭和天皇に

<sup>102</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」955-956頁。「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷二」510-514頁。「足柄新聞」1937年6月29日。

<sup>103</sup> JACAR:B02030916800。

<sup>104</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」921-923頁。

<sup>105</sup> 同上、924-925頁。

<sup>106</sup> JACAR:B02030916800。

<sup>107</sup> 鈴木監修、芦澤編『秩父宮雍仁親王』680-685頁。

<sup>108</sup> 海軍有終会編『近世帝国海軍史要(増補)』(原書房、1974年)800-803頁。

<sup>109</sup> 文化面では1937(昭和12)年2月から3月にかけて日独合作映画「新しき土」が両国で公開され記録的ヒットを飛ばしている(海老坂高「日独合作映画『新しき土』をめぐって(その1)』『帝京大学外国語外国文学論集』第9号(2003年2月)130、146頁)。

<sup>110</sup> 「昭和十二年 公文備考 F 艦船 卷三」1196-1197頁。「公文備考」には、浄書された大臣に対する「任務口頭報告案」、手書きの「奏上案」及び浄書された「奏上文」の3種類が残されている(「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」1000-1009、1464-1482、1486-1495頁)。内容的

任務完了に関する奏上がなされている<sup>111</sup>。

そこでは「足柄」の主任務が「……英國皇帝陛下戴冠式記念観艦式ニ參列シ且ツ獨國ヲ訪問……」することであったためか、あるいは前述したように細部については別途書類で報告することにされていたためか、小林少将からは「……儀禮的使命ヲ達成シ親善關係ノ助長増進ニ資シ在留邦人ヲ鼓舞激勵致シマシタル等其ノ大任ヲ完フスルコトヲ得マシタ……」とする総括的な内容のみ報告されている。

一方、英国からドイツまで「足柄」と行動をともし、その後、フランス及びアメリカを広く視察してきた新見少将の軍令部総長に対する任務報告には、欧州情勢を見通したうえで日本の将来を暗示した鋭い洞察が示されている。即ち、「[欧州] 各国の今やっている軍備が充実して支度ができれば、武装した平和時代を現出し……その武装せる平和が終局において戦争に終わるのは〔第1次〕世界大戦が証明している……」とし、欧州における戦争の可能性を示唆したうえで次のことを進言している<sup>112</sup>。①日本がドイツ、イタリアとの間に防共協定以上に関係を深め、欧州政局の渦中に巻き込まれないよう自由な立場でいること。②もし日本がドイツ、イタリアに味方すれば、英国、アメリカ、フランスを敵とすることになること。③そして日本が何れの道を採用すべきかは自明であること。

しかし、日本は「足柄」の帰国前日に勃発した盧溝橋事件を契機に大きく舵を切ることによってドイツへの傾斜を一層強め、アメリカ、英国を敵とする真珠湾への道を選択することになってしまうのである。その結果、「足柄」が英国を訪問した日本海軍最後の水上艦艇となった。

(防衛研究所戦史部 第1戦史研究室所員)

---

にはほぼ同じであるが、ドイツ側の便宜によりキール運河の通航料を免除された件については、「奏上文」から削除されている。

<sup>111</sup> 「昭和十二年 公文備考 C 儀制 卷一の四」1453頁。

<sup>112</sup> 提督新見政一刊行会編『日本海軍の良識 提督新見政一』90-91頁。

「軍艦足柄獨國在泊中交換見学ニ於ケル見学許可範圍」

一、外國官憲又ハ外國海軍ヨリ觀覽申出アリタル場合ハ左ノ範圍ニ依リ之ヲ許可スルコトヲ得

(一) 艦内一般觀覽ノ程度トシ實害ナキ三類ニ及ブコトヲ得

但シ左ノ事項ハ觀覽セシメザルモノトス

(イ) 改装セル事項

(ロ) 砲術關係

(1) 主砲指揮所、測的所、發令所

(2) 高角砲指揮所

(3) 砲 塔

(4) 高角砲 (覆ヲ掛ケ其ノ性能、機構ヲ秘ス)

(5) 九一式徹甲彈及同教練用彈丸、高角砲彈藥包及同教練用彈藥包

(6) 防毒「マスク」

(ハ) 水雷、航海關係

(1) 發射管室 (已ムヲ得ザル場合ハ通過ノミヲ許ス)

(2) 發射管、魚雷格納所及魚雷運搬車其ノ他魚雷口徑等ヲ周知シ得ベキモノ一切 (常ニ覆ヲ掛ク)

(3) 發射指揮所

(4) 發射發令所

(5) 羅針艦橋及見張所

(6) 十二糎以上双眼望遠鏡 (架臺ニハ覆ヲ掛ク)

(7) 特用空氣壓搾機室

(二) 無線、電氣關係

(1) 無線電信所室

(2) 印字機室外裝備ノ超短波電話機及當面ノ任務ニ差支ナキ空中線ハ撤去ス

(3) 發電機室

(4) 管制盤室

(5) 九二式探照燈及九四式探照燈管制器

(ホ) 船体関係

- (1) 中甲板以下機械室、罐室ノ範圍
- (2) 防毒施設ノ要領ヲ窺知シ得ル特殊通風装置、酸素補給装置、炭素瓦斯吸収装置、防毒装置（兵員室通路等ニ設クル大排氣送風機、洗淨装置等）  
（成ルベク眼ニ觸レザル様留意ノコト）
- (3) 檣樓諸施設

(ヘ) 機關關係

- (1) 機械室
- (2) 罐 室

二、一般外國人ノ觀覽

一般外國人ニ對シテハ成ルベク觀覽ヲ許可セズ

但シ已ムヲ得ザルモノニ限り第四類ノ範圍ニテ觀覽セシムルモノトシ海軍觀覽規定第七條ノ規定ニ不拘司令官之ヲ許可スルコトヲ得

三、在留邦人ノ觀覽

海軍觀覽規定ニ依ル

四、其 他

- (一) 外國ノ港灣ニ於テハ棧橋又ハ岩壁ニ横付セザルコト
- (二) 砲戰教練實施ノ場合ハ砲ノ最大仰角ヲ察知セシメザルコトニ付特ニ注意ノコト
- (三) 適宜艦内諸室等ノ目釘ヲ取外シ置クモノトス
- (四) 搭載飛行機ノ機体ニ記載ノ要目ハ抹消シ置クモノトス